

我々は様々な音に囲まれ、その環境下で生きている。音と認識される人の可聴域は22kHzとされるが、それ以上の音が聞こえないからといって意味のない音であるわけではない。大橋力の『音と文明－音の環境学ことはじめ－』（岩波書店）によると、自然環境の中に存在する、音として認識されない可聴域を遥かに超える高周波数が耳ではなく体表面で感受され、自律神経系、免疫系などの基幹脳を活性化させ、プラスの効果をもたらすというのである。自然環境から引き離され、貧弱となった現代文明の音環境の中に住んでいる我々の身体と音と環境との関係を見直すきっかけとなる書。

偏った音環境を再考する書として藤枝守の『響きの考古学－音律の世界史からの冒険－』（平凡社ライブラリー）。現在我々が当たり前前に聞いている音楽は平均律に基づくものである。平均律というのは、1オクターブを12等分した音律である。この音律は西洋において19世紀に普及し始めたものであり、一時代の一地域のものにすぎなかったのが、今やグローバル化の進展により、音が世界的に均一化、標準化してしまい、歴史的、地域的に様々な音律が存在したことが忘れ去られるようになっていく。インド、アラブ、中国の音律や近代以前の西洋の音律との比較、廻行による音楽の豊かな可能性や多様性を耳に取り戻すための一冊。

音楽とことばの関係について考えるのなら、音楽学、考古学、人類学、神経科学、言語学の知識を動員してまとめられたスティーヴン・ミズンの『歌うネアンデルタール－音楽と言語から見るヒトの進化－』（早川書房）。音楽と言語の原型となった「HmMMM」(holistic, multi-modal, manipulative, musical) がヒトにおいては、そこから音楽と言語が分離し進化したが、ネアンデルタール人においては分離されず一体化したまま進化したという。要素の組み合わせからことばが生まれたと考えるのではなく、まとまりとしてのユニットを要素に分節化する過程にことばの起源を見出す。歌とことばの共通性と相違性を考えるのに格好の書。

ヒトや類人猿以外にも歌う種に鳥がある。岡ノ谷一夫の『小鳥の歌からヒトの言葉へ』（岩波科学ライブラリー）は、鳥の歌の持つ音パターンの構造の解明とそこから人間のことばの起源を性淘汰説に基づき探る書。なぜ歌を歌うのか、この

ことについてきっと理解が深まることであろう。

正高信男の『0歳児がことばを獲得するとき』（中公新書）は1歳になるまでの赤ん坊と母親との主に声を通じた相互作用による言語獲得を論じた書。我々が幼い頃に身につけたことばは、決して自然に何となく身につけたものではなく、周囲との相互作用なしでは獲得し得ないものであったことを教えてくれる。我々は周りの「声」なしでは何事もなし得ない。

ここに挙げたいずれの書も、我々の持つ身体と環境と音との豊かな関係性や多様性を解きほぐす導き手となってくれることであろう。

執筆者紹介

加納 満

教育開発系准教授。専門領域は、言語学、スリランカ手話、日本語教育。

- 『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『音と文明 音の環境学ことはじめ』大橋力著 岩波書店 2003年 4,620円
『響きの考古学 音律の世界史からの冒険』藤枝守著 平凡社ライブラリー 2007年 1,365円
『歌うネアンデルタール 音楽と言語から見るヒトの進化』ステイーヴン・ミズン著(熊谷淳子) 早川書房 2006年 2,310円
『小鳥の歌からヒトの言葉へ』岡ノ谷一夫著 岩波科学ライブラリー 2003年 1,155円
『0歳児がことばを獲得するとき 行動学からのアプローチ』正高信男著 中公新書 1993年 693円

ブックガイド目次へ